

氣 Kyokushin Karate 2011.12 武

◇港支部ホームページアドレス◇
http:karateman.jp

志田道場 六本木・新橋・田町 師範 志田清

夏季昇級昇段審査会のお知らせ

◎日時 2011年12月17日(土) 12時30分～

◎会場 極真会館 六本木道場

〒106-0032 東京都港区六本木4-9-5 ISOビル8F
TEL03-3459-9998(問い合わせ用)

●審査の申し込み締め切り日12月15日(木)

●新橋道場追加審査日:12月24日(土)12時30分～(六本木道場)

●六本木道場追加審査日:12月24日(土)12時30分～(六本木道場)

※追加審査会対象者:白帯～8級

注) 本部登録を済ませていない方・不備で再提出の方は12月15日(木)までに師範・指導員に提出して下さい。

注) 昇級審査受審資格 合宿参加規定回数が変更になりました。

○黄帯→緑帯 1回 ○緑帯→茶帯 1回 ○茶帯→黒帯 1回

あまり稽古が出来ていないからといって躊躇している方もいると思いますが、まだ審査会まで時間はあります。皆さん頑張って下さい。

稽古の目的とは?

武道空手を稽古する目的は、武道の「理合」を学び体得し精神力の養成を目的とする。武道では、理にかなった術技の仕組みの事を古来「理合」と呼んでいます。理合(理にかなった)のある身体の動かし方、術技方法、力の使い方・出し方が古来武道稽古の目的とされています。空手の稽古では、理合のとれた術技と、体格腕力でかける技とを混同しやすく、理合なのか腕力体格なのか分からないまま稽古してしまいやすいのも事実です...
基本・移動・型・組手の型にどのような理合が隠されているのか? 筋肉腕力ではない理合の術技とは? 強靱な精神力とは? 自らが気付き見つけ自分の物にしていきます。理合がある高次元で術技を使えるように稽古をする事が毎回の稽古目的であり、すなわち自分よりも強い相手を制する心身の養成となります。理合:人間の身体の仕組み、生体反応を利用し活用する事

年末年始スケジュール

- 六本木稽古納め・忘年会 12月20日(火)
- 新橋稽古納め・忘年会 12月21日(水)
- 合同追加審査 12月24日(土)
- 道場冬休み 12月25日(日)～2012年1月3日(火)
- 稽古始め、六本木・新橋道場 1月4日(水)

お友達ご紹介キャンペーン

☆こんな時代だからこそ、大切なご友人と
武道稽古で心と身体を強くしましょう!!

Kyokushin Karate Tokyo Jonan Minato Shibu

このチケットで、ご入会者と紹介者の方に空手着を無料進呈いたします。

お友達ご紹介キャンペーン



道着無料チケット



何かを始める事に遅いという事はありません。

武道家のバイブル「葉隠」

○機転の心づかい

丹波篠山城主松平大和守殿の江戸屋敷に、鍋島綱茂公をはじめお客人が招かれ、夜の宴会が催されたときのことである。旗本で老齢の北見久太夫殿も出席され、むかしの合戦話はずんだ。夜が更けて、給仕の小姓が銚子を運んでいたところ、つまずいて久太夫殿のひざに酒をかけてしまい、その小姓は顔を赤らめて退出した。すると、すぐほかの小姓があらわれ、久太夫殿をつぎの間へ案内して着替えさせ、あとまつをしたのであった。さて、後にこの一件を調べたところ、恍惚老人の久太夫殿が長座したため、すわったまま小水をたれ流していたのを、小姓たちがめざとく見つけ、わざと酒をかけてその場をとりつくりつったということがわかった。そして彼らは、ほうびを与えられたという。

○口論のコツ

口論のコツは、なるほどもつとだど折れて見せ、相手に全部いわせることだ。そして相手が図に乗っていいすぎたとき、弱みを見つけて反撃し、存分にのけることである。

○奉公は今日一日

生野織部[光茂時代の家老]はこういった。「奉公は、今日一日のことと思えさすれば、どんなこともできる。だれでも一日の仕事なら辛抱できよう。そして翌日もまた一日なのである」

○早すぎる出世は危険

あまり若いうちに出世するのは、長持ちしないものである。五十前後になってから、しだいに完成するのがよいのだ。それまでは、人びとから出世が遅いと思われるぐらいのほうが、かえって大成する。また、志をもっている者は、一時は失敗するようなことがあっても、不正なことを考えないから、早く立ち直るものである。

○同僚に先を越されたとき

理由もないのに同僚に先を越されて、自分がその下位になったとき、少しも心にかげず奉公をつづけている人がいる。また、おもしろくないと文句をいい、身を引いてしまう人もいる。どちらがよいかというのは、時と場合によるであろう。

○昇進をあせるな

「大器は晩成す」といわれる。二十年、三十年かかって成し上げるようであればなければ、大きな成功は得られない。奉公についてもそうである。あせる気持ちがあると、自分の役割以外のことにしやばり、若手の敏腕家などといわれ、調子に乗って無思慮になり、得々としてやり手ぶっているうちに、上に追従したり浮ついたりする気持ちが出てきて、ついには人からとやかくいわれるようになってしまう。自己研鑽につとめ、自然と人から引き立てられて昇進するようであれば、本当の働きはできないのである。

○口上の色気

小早川隆景があるとき、さる筋へめんどろな申入れを行うため使者を派遣することになった。隆景は、これに先立ってその使者を佐賀へさしむけ、鍋島直茂公に「申し入れの口上についてお教えいただきたい」と頼んだ。直茂公はお会いになって、使者の口からその口上を聞かれると、こういわれた。「口上の内容自体は申し分ないと思う。ただし、この口上は、言い方に色気が必要であろう。能楽にしろ琵琶にしろ、上手なのを聞くと泣かされてしまう。下手なのは、文句や節回しは同じでも、色気がないゆえ、さっぱり涙が出ない。これは、口上を申しのべるさいの、その方の心得というものじゃ」使者はたいそう感謝して帰ったということである。

